

浄土

1987-4

昭和十年五月二十日 (第三種郵便物認可) 毎月一回一日発行
昭和二十四年四月二十八日 (運輸省特別扱承認雜誌) 第三二五号
昭和六十二年三月二十五日印刷 昭和六十二年四月一日発行
第五十三卷 四月号



春

四月の秀句

針のひく糸の尾ながき弥生かな

久保田万太郎

且よりしづかに眠り春深し

日野草城

花祭みづやまの塔そびえたり

飯田蛇笏



四月号



其の国の衆生、もろもろの苦しみあることなく、ただもろもろの楽しみのみを受く。ゆえに極楽と名づく。

——『阿弥陀経』

目次

<連載法話>②

ボケるのが怖い……………大室了皓……(2)

エッセイ

春窓雑想(二) ——哲学の道あれこれ——……戸川 靈 俊……(7)

=江戸物語=(3)

大 奥……………細 田 隆 善……(16)

父を想えば……………栗 田 順 丈……(12)

<読者の便り>

煩惱・我執……………吉 田 勇之助……(26)

(木)(下)(隆)(一)(随)(筆)(集) <1>

海と山の狭間で

——桜に関する一考察——

……………木 下 隆 一 ……(28)

◇◇長篇連載小説◇◇

立ち止まるな善導 第34回

歴 史 の 空 洞

……………寺 内 大 吉……(35)

挿絵 松濤 達文

表紙絵「桜」 松浦春子画

連

載

法

話

<2>

ボ
ケ
る
の
が
怖
い



昔の年寄りには、

「死ぬのが怖い」

という人が多かったそうだが、今の年寄りとは違う。

「ボケるのが怖い」
と言うそうだ。

大正時代の平均年齢は四十三才ときくからボケるまで、長生きする人は少なかったのだ

おおむろりょうこう
大室了皓
(大本山増上寺執事
東京・品川区光取寺住職)

ろう。

いま日本は世界に誇る長寿の国となった。

男女の平均年齢はおよそ八十才である。

しかし年取ったからといってみんながみんなボケるわけではない。ほぼ六パーセントというから、一〇〇人のうち六人ほどにすぎないが、ボケ老人の惨めなことを、時には家庭が崩壊しかねないことを身近に知っているから、その六人の中にもしも入るようなことがあつては……と心配するのである。

あなたは大丈夫ですよ、といわれても何の保証もない。当人たちにとっては皮相的な気安めにしかない。

お医者の中には、年取っても仕事をする、計算なども面倒がらずにして頭脳の老化を防ぐ、なにか趣味をもつ、指先きを使うことなどもよい……という人が多いが、それを行えば決してボケないのかというと、

「確信はないが良いはずだ」

という答えが返ってくる。

死のことは今まで、縁起が悪いといって話題にすることは忌み嫌われていたし、また、

「どうにかなるだろう」

といって、元気で生活しているうちは、自分の死をなるべく考えないようにしていたきらいがある。

ところが不治の病いである癌の告知をめぐって、いろいろな議論が交わされたり、死を目前にした人へのターミナルケアが大きな課題としてとり上げられるようになったり、高齢社会を迎えて、ボケへの恐怖が高まってきたことなどから、死への関心が高まり、これを捨てておくことのできない風潮がおこりつつある。

そもそも、人生の一大事は、誕生と死であるが、誕生は生まれてきて物心がついた時にこれを知るものであつて、まったく自己の意思の働く余地はないので、これについて悩む人はありえない。

一人として自分の誕生日のことを知ってい

る者はいない。

「どうして知っているの」

とからかうと、

「親が教えてくれたから」

と誰でもいう。

気がついたら、この世に生まれて来ていたのである。

一方の死はどうなのだろうか。

気のつかないうちに死んでいく人々も少ないが、この人たちはあくまでも例外だ。

お経には、

「海上はるかに逃げるとも

岩屋の奥深くかくれるとも

魔王の使いは必ず見つけ出し

死の淵に送られてしまう」

この誰も逃げられない死をどのように迎えるかを考え始めると、死の重大さが解ってくる。

その人がどのように最後を迎えるかは、その人がどのように生きてきたかによって左右

される。死とはその人の長い生涯の凝縮した結果のあらわれたものと考えるのである。

二十年もまえのことであるが、埼玉県川口市のどぶ板を踏んで入っていく小さなアパートの一室で八十歳近くの老女が亡くなっていた。死後一週間程も経っていた。近所の人たちが哀れに思って、ささやかながら野辺の送りをした。

遺品の整理をして、みんなが驚いた。

今までだれも知らなかったことが判明したのである。

彼女は普通のオバアチャンではなかった。

かつての銀幕の女王だったのである。名は伏せておくが、七十歳すぎの人たちならよく知っているはずだ、ある映画会社の女優であった。

それほどの人が、誰にも見とられることなく、淋しくなくなった。

若い全盛の頃はさぞ華やかな日々を送っていたであろうに。

幸、不幸はあくまでも本人の気持ちの問題であって、はたの人たちが外見だけで軽々しく判断できるものではない。この人もそれなりに幸せと生きていたのかもしれないが。よほど悟った人でないかぎりむづかしいことだろう。

かつては全国の子女の紅涙をしぼったであろう人が人生のたそがれになって、一人も振り向いてくれなくなったのであるから、おそらく濁世の闇に泣いたに違いない。

このことを知った映画会社では、彼女の死を悼んで盛大な葬儀をして報いたという。

なんの苦痛もなく、暖かい家族や隣人に囲まれ、惜しまれて生涯を全うすることは、万人の願いであろう。

しかし、誕生が自分の意志とは関係なかったように、これもまた仲々思い通りにはならないことが人の世の悲しみである。

善導大師の「発願文」に、

「願わくは人々よ、命おわる時にのぞんで、

心 転倒せず、心 錯乱せず、心 失念せず、身も心にももろもろの苦痛なく、身も心も安樂にして禪定にいるが如く、み仏は現に前にましまして、み仏の本願に乗じて阿弥陀仏国に上品往生せしめ給え……」

とあることをみても、平安のうちに生涯を終えることは、遠き昔より人々の悲願であったことを知るのである。

ボケ老人の錯乱して亡くなる姿を見聞すると、あらたな気持ちになってこの「発願文」を読ませていただくのである。

法然上人はどのように教えておられるのだろうか。

上人は幸せに日々を送れる人とは、極楽往生うたがいなしと信じることが出来る人であり、人生の最後の目的は往生極楽であると説いておられる。

では、ボケ老人の最後を錯乱往生とするならば、どうしたらボケることなく立派な最後を迎えることができるのか、言葉をかえれば

正念往生ができるのだろうか。

上人は「太胡の太郎実秀へつかはす御返事」のなかで、

「まめやかに往生の志ありて、弥陀の本願を疑わずして念仏を申さん人は、臨終の悪ろきことは候まじきなり。その故は、仏の来迎し給う事は、もとより行者の臨終正念のために候なり」

とのべられている。

つまり、「念仏を称える人は必ず正念往生をさせていただくことができます。だから念仏に励みなさい」と教えておられるわけである。

ただここで大切なことは、「つねに仰せられける御詞」のなかで、

「念仏申さん者十人あらんに、たとい九人は臨終あしくして、往生せずとも、われ一人は決定して往生すべしと思うべし」

固い信を欠いたならば、正念往生はできないぞと言われているのである。

上人は「信」こそ基本であることを、「選択集」のなかでも、

「生死の家には疑いをもって所止となし、涅槃の域には信をもって能入とす」

として、信を欠くべからずと遺しておられる。

これらのことから、ボケから私達を確実に救う道は、医学に求めることはできない。お念仏こそただひとつの道であると私は信じるのである。

老齡社会のもっとも大きな課題であるボケ老人の解決を、私はお念仏の教えに見いだすのである。

若い丈夫な時から、念仏に励んできた人は、その功が積り凝縮してまぎれもなく正念往生することができるとを、上人は教えておられるのである。

(つづく)

春窓雑想 (二)

— 哲学の道あれこれ —



戸^と川^{がわ} 霊^{れい}俊^{しゅん}

(京都・左京区西住院住職)

琵琶湖から引いた疏水が、蹴上で分流されて、それが東山のトンネルを若王子のあたりで抜け出る。南に流れる京都の他の河川とは逆に、そのあたりから疏水の分流は、東山の麓を北に向って流れる。その流れ沿いの小道を、今日の「哲学の道」と命ばれるようになったのは、いつ頃からのことであらうか。

子供の頃は、ただなんとなしに、その流れで蜷^{ずな}蛄^こを漁ったり、夏の夕には、螢を追ったり、中学生の頃になると、学校の帰りには水泳ぎをしたりで、「哲学の道」という業々しい名前も聞かなかったし、恐らく附いてもいなかったものであろう。

東山の麓を、南は若王子神社の前から、北

に銀閣寺の門前のあたりまでこの道は走っている。

東山沿いのこの道と、向い側につらなる吉田山（神楽岡）・黒谷山（栗原岡）の間は、一面に鹿ヶ谷村浄土寺地の田圃であつた。鹿ヶ谷かぼちゃもこのなかに栽培されていた。

文科の哲学の講座が開設されて間のない頃、大西祝や柴木敬翼の後を継いで、金沢の旧制四高から「善の研究」の若き西田幾多郎が赴任してきた、そのあたりが、京都の「哲学の道」の発足とも言えようか。

大学のキャンパスの附近は、未だ学生街としても今日のように十分に発展もしていない。

白川、一乗寺、そして疏水の流れに沿う道でしかないけれど、その道のあたりには、靈鑑寺・安楽寺・法然院・銀閣寺の寺々があり、それにいくつかの皇陵の醸もし出す風景は、思索しつつ、哲学しつつ、大学の往きかえり

を歩むに、学人にとって好個の道であつたのであろう。

今のように、学生下宿の行き届いていなかった時代、農家の一室は、地方から学ぶ学生のこよなき書斎でもあつた。

この国の哲学という学問の主流か、ドイツ観念論哲学であつただけに、誰れ思うともなく、この逍遙の道を、ドイツのそれになどらえて、哲学者の歩む道すなわち「哲学の道」となってきたのであろう。

京都学派——こんな固有名詞のある筈はない。ありとすれば経済学にもあるだろうし、東洋史学にも言えるだろう——の哲学の後年の先生たち、カント哲学の高坂正顕、フイヒテ哲学の木村素衛、三高教徒から一転して東大学生となつて話題の人となつたニイチェの土井虎賀寿、そして、観山雪洲、務台理作らも若き日の「哲学の道」のペDESTリアンで

あつたと思う。

「人間の学としての倫理学」、悠々迫らざる講義の和辻哲郎博士のお住居は大正の末以来若王子神社の社域内の風雅のお邸であつた。

これもいまは亡きギリシャ哲学の田中美知太郎博士を訪れる者にとっては、通らねばならぬ、この「道」はおのづと師への哲学の道ともなつた。

疏水分流が開削された頃は、水面も広く、底も比較的に浅く、ゆるやかに北山に向け松ヶ崎水源池に流れていたが、数年前、川幅を狭め、底を深くし、岸の石積みも高くしたのを機会に、市が道路に手を加え、躑躅を植え、芝を栽えたり、ところどころにベンチを置いたり、そのへんにある小公園まがいにしてしまったので、元の野趣ある素朴な「哲学の道」らしい風情は失せてしまった。この時に、初めて、若王子神社への渡り橋の畔に

「哲学の道」の石標がお目見えしたのである。

観光案内書の類は、しきりに京の観光名所の一つとして「哲学の道」を宣伝しはじめる。

修学旅行のシーズン、休日のもとより、平常でもここを訪れる人達で、四条、三条通以上の賑いである。

静かな法然院の墓域に眠るフランス哲学の九鬼周造、無我愛道場に袂別してマルクスの唯物史観に生きた河上肇博士の歌碑に惹かれてこの道を歩む若者はどれ位あろうか。

京の東山沿いの北の「哲学の道」も、平凡な、どこにでも見られるような、手入れの行き届いた単なる小公園に化してしまった感がないではない。

観光寺院銀閣寺が古都税問題で拝観を停止したせいで、この頃「哲学の道」への観光客の足が幾分遠のいたという。この銀閣寺のこゝとを理由に、減った観光客の数を再び回復さ

せるための手立ての研究に、「哲学の道」ぞいの土産物品店や喫茶店やレストランでつくっている組合が、遙かドイツのハイデルベルクの「哲学者の道」と連携を求め、研究のため代表を送るというニュースが伝えられた。

ハイデルベルクをいうならむしろ、日本のハイデルベルク、四高寮歌の「北の都」金沢に、もう一つの「哲学の道」をたずねてはどうであらうか。

卯辰山、野田山、或いは犀川畔、浅野川畔、浄土真宗の今にいきずいているところ。そして、加賀大乘寺が典型とされているように、今も堅く道元禅の守られているところ。加賀を故郷とし、そこに学び、そこに教鞭をとり、日本最初の哲学のヒューマン・ドキュメントともいふべき「善の研究」を思索したその地。そこに彼の人格を形成していった思索の道が辿られるに違いない。高坂正顯もまた金沢に

学んだ。

野田山は、加賀藩代々の藩主の廟が、段々に設けられて、エジプトのピラミッドに比べても劣らないものだ——往年、学部旅行で訪れた日、先輩である県立図書館長から伺ったことである。

ハイデンベルクの「哲学者の道」といえば、当然、その背景に、根底に、ハイデルベルク大学の存在を忘れてはなるまい。

ケーニヒスベルクも、ライプツヒも閉鎖されたり、改組されてしまった今日、中世紀最後の西ドイツ最古の大学であるハイデルベルク大学の哲学者を措いては「哲学者の道」は考えられないと思うのである。

幸いに、この町は、米軍の爆撃を免れた唯一の町である。大学はナチスによって閉鎖され、自らも大学を逐われたが、平和の日の訪れとともに、再び大学に迎えられた日の大学

総長カール・ヤスペルスの、全ドイツ国民にむけてなされたラジオ放送「国民と大学」での、「大学は、いつも、政治権力に向っては無力である。ただ、つねに精神と真理だけが吾々の味方である——」の言葉は忘られないであらう。

道の傍らに、ビールを飲ませる店があつてもよろしい。綺麗なブーケを置く店があつてもよい。しかし「哲学の道」が単なる京の観光名所と化しては無意味である。

ドイツ程でなくとも、「哲学の道」を歩んだ、そのかみの哲学者の存在を忘れては、「なんだ、こんなところか」の軽い気持に終つてしまふだけだ。

若王子の「哲学の道」の始点から、南に二つの道が伸びている。一つは、神社の境内を抜け、戦前は老杉が森々として、昼なお暗かった山の径が、山上の同志社校祖新島襄の墓

域へとつづき、もう一つは田能村竹田の遺業の画堂から瑞龍山南禅寺とつづく。

西田哲学の立場が仏教的で、しかも禅を基盤とするだけに、哲学に志を寄せて「哲学の道」を歩んでくる若人達の思いには、自づと、禅の巨刹南禅寺道場に足が赴くのであらう。

南禅寺は「哲学の道」の延長線上にあつて、一つの受け皿ともなっているのであらうか。

かつて河野霧海老師、柴山全慶老師ら、秀れた禅の巨匠が董されていた。西洋哲学にも造詣の深かった柴山老師が、どれだけ「哲学の道」を歩んできた若人らの師表であられたことか。禅録提唱の老師から、曹洞宗の衛藤即応博士の「正法眼蔵」についての学位論文の、当時入手困難な岩波刊行本を読んでいだいたのも追憶深い。

時に陽春。「哲学の道」疏水べりの関雪桜も、やがて見頃であらう。

短

編

小

品

父を想えば

栗^{くり}田^た順^{じゆん}丈^{じよう}

「おい」

海に向って小石を投げようとしていた私に、父が声をかけた。ふりむくといつの間に來たのか、父は私のすぐ後の砂浜に腰を下していた。

「もう用事は済んだの」

「いや、お母さんたちのおしゃべりがいつまでも続くから、おれも抜け出して來たのさ」

「そう、じゃあ、まだ当分帰れそうもないね」

私は、そういうと持っていた小石を海に向けて投げた。

春の暖かそうな陽光を受けて、キラキラと光っている海に、小石は小さな水しぶきをあげて落ちた。

「おまえ、自分でどんな人間になりたいと思っているんだ」

父が再び後から声をかけた。

「えっ」

私はふりむいて聞き返した。波の音が父の声を消していた。父は、小石を拾って立つと私の横にきて、

「いや、おまえももう高校生になったんだから、人生に目標ぐらいは持っているだろうと思って、ちょっと聞き

たかったのさ」

といって、ピッチャーのようなモーションをして小石を投げた。私のよりはずっと手前に水しぶきがあがった。

もう二十数年も前のことである。たしか四月の日曜日だった。私は家族とともに小田原の親類の家に来ていた。母たちの話に興味のない私は、一人で近くの海岸に出ていたのだった。

「人生の目標！そんなものまだあるわけないよ」

私は砂浜に石を探しながらいった。

「そんな情ないことこうなよ。おまえぐらいの年になれば、何になりたいかぐらいは考えているんじゃないの。小学生の頃にはあれになりたい、これになりたいといっていたじゃないか」

父はニコニコしながらいった。

「情ないって言ったって、本当だもん。しょうがない

よ」

父のいうように、私が小学生の頃には、パイロット、野球選手、レーサー、医者、弁護士……などに成りたいとよく言ったものだ。しかし、中学から高校に来てみれば、自分がそういうものに向いているかいないかぐらいはわかるし、また能力だって少しは見えてくる。今から思えば、この時の私は、夢から現実への移行期のようなだったと思う。

私は拾った石を、「ちきしょう」と思いながら投げた。自分の無能力を自分で認めたような情ない気持ちだった。石は前回より少し遠くへ飛んで落ちた。

「じゃあお父さんは、ぼくぐらいの時、何になりたかったの」

今度は自分が投げる番だとばかりに、下を見て小石を探している父に、私は訊いた。

「おれは船の設計士になりたいと思っていた。それで計算や図面書きの練習もずいぶんしたもんさ。世界一の船を造ってやるなんて思っていたよ」

「でも、結局はだめだった」

「うん、戦争が始まって兵隊にとられちゃったからね。」

それに、戦争が終ってからには食べることに精一杯で、とても勉強どころじゃなくなった。でも、戦争がなくなっても、そんな設計士にはなれなかったと思うよ。おれだって自分の能力ぐらいは知っていたからね」

小石を拾った父は、こういいながら大きくふりかぶると、さっきと同じようなモーションで投げた。今度は私と同じくらい飛んで落ちた。父は満足気な顔をして私を見た。私にもっと遠くへ飛ばしてみろ、というような顔つきだった。私は、軽からず重からず、持ちやすい石を探して拾った。敗けられないと思った。

「今は、おれたちの時代と違って、自由だし、戦争もない。やろうと思えば何でもやれるのだから、おまえもがんばれば首相だって夢じゃないんだぞ」

「何でもやれるっていったって、それなりに頭も必要だよ。それに、ぼくは政治家なんかにはなりたいたとも思わないよ」

こういうと、私は手にしていた石を思いきり投げてみた。

石は理想的な放物線を描きながら、それまで投げたどの石よりも遠くへ飛んだ。今度は私が「どんなもんだ」

という顔で父を見た。父は、うれしそうな笑顔で私を見て、「うん」とうなずくと、また石を探しはじめた。横顔を見ると、唇の間から舌が少し出ている。父が何かに夢中になった時のくせだった。

「おれは、お前に出世してほしいとなんか思っていないよ。ずるい人間にだけはなってほしくないからね。ただ自分が一生をかけられるようなものを見つけてほしいと思っただけさ」

手ごろな石を見つけると、海に向って父はいった。そしてまた同じようなモーションで石を投げた。石は二度目と同じところに落ちていった。

「いいかよく聞けよ」

父は手をたたきながら、ふりかえりいった。微笑が消え、真面目な顔になっていた。

「おまえが何になろうとかまわないが、おまえの人生というのは、自分で生きる自分の人生だ、ということをよくわかってほしい。おれのものでも母さんのものでもない。おまえ自身が生きる人生なんだ。良くするも悪くするもおまえ次第、おまえが自分で考え、判断して決めればいい。そのためには、これからが大切なんだ。学

業はもちろん、もっと広い世間も見なければいけない。遊ぶのもいい。酒を飲んだってかまわない。学生運動に入ってたっておれは何もいわない。だけど、これらは自分の人生のためのこやしにするんだ、と置いていてほしい。それを忘れてただ遊んでばかりいたら、人生の落伍者だ。いいか、自分の人生なんだから、自分で責任を持って生きるんだぞ。悔いを残さないようにな」

「……」

真剣に私を見つめる父に、私は何もいうことができなかった。父のそんな顔をこれまでに見たこともなければ、またこんな話をしたこともなかった。

父は無口ではあったが、いつもニコニコしている、といった人であった。小心で真正直で、人から何か頼まれると断われないような性格であった。家族と一緒にいる時は、いつも聞き役にまわり、私たちの話をニコニコしながら聞いているだけであった。自分ではほとんどしゃべることがなかった。そして一人の時はいつも本を読んでいた。

こういう人だっただけに、父の真剣な顔は私を圧するほどの力を持っているように思えた。

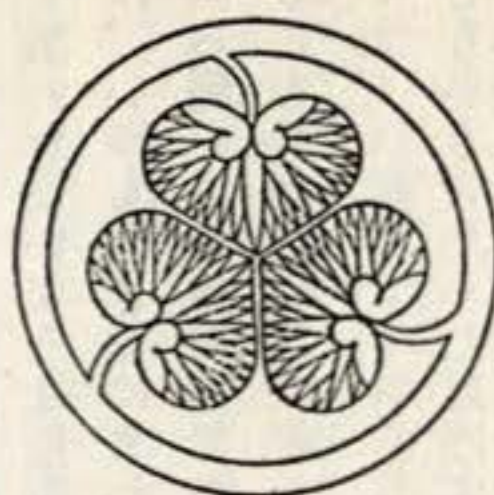
父が死んでもう四年になる。生きている間は、あの時の父との会話など滅多に想い出すこともなかったが、死んでみるとやけに懐かしく想い出されてくる。特に四月という季節になって新入生の姿などを見ると、あの時の情景、父の顔、そして父の声が……。

残念ながら、私は父と語り合ったという気憶が、この時のただ一度しかない。私としても、真面目な話など照れくさくてしにくかったし、父もまたそうではなかったかと思う。近くにいればいるほど、父子とはそういう話がしにくいのかも知れない。父は悔いを残すような人生は送るな、なんでもやってみろといっていたが、これだけは悔いが残るような気がする。父にとってはどうなのだろうか。

もし、今、父が生きていたら、酒でも酌み交しながら人生というものを語りあってみたいと思う。私にも少しは人生というものがわかるようになってきたのだから。父はなんていうだろうか……。

江戸物語

(3)



大奥

江戸城の内郭は、本丸、西ノ丸、二ノ丸、三ノ丸その他の建物がある。本丸は將軍の表という公的建物と奥という私的建物に区分される広大な木造建造物である。西ノ丸、二ノ丸、三ノ丸の建物は、大御所、大御台所、將軍の世子等々が起居する建物であって、本丸を縮小した建物、それぞれ表と奥がある。本丸は表、中奥、大奥の三つに区分される。表は幕府最高の政府機関であり、中奥は將軍の生活の場であり、大奥は將軍の妻妾と関係女性

細田隆善

(俳号・豊明)

江戸は全国総城下町
江戸は世界一の人口
江戸は日本の縮図
江戸で日本の富の半ばが消費
江戸文化の出現

の生活の場である。弘化二年(一八四五)本丸の建築面積は一万一千七百七十三坪もあって、世界最大の木造建造

物であったことは余り知られていない。

さらに驚くべきことは本丸の面積のうち、表と中奥を合わせた面積五千五十五坪であるのに対して、大奥の面積はそれを遙かに上回って六千三十八坪もある。浄土宗総本山知恩院の国重文指定の大本堂（御影堂）の建築面積は六百九十坪である。大奥の建物は知恩院本堂の十倍近くもある広大なものであった。この広大な建物を大奥が必要としたのは、大奥に千人内外の女性ばかり居住していたからである。大奥には將軍以外男性は一人たりとも入れなかった。一人の男性が入ったとすれば、歌舞伎役者生島新五郎が長持の中に隠れて大奥に入り御年寄絵島と愛を交わしたとぐらいであろう。これほど大勢の女性が將軍妻妾のために必要であった事實は、世界にもその例は少ない。なぜこのような大量の女性軍団が必要となったか一考を要する。

將軍の本妻は御台所^{みだいどころ}という。御台所は將軍家光以降、京都公卿出身の娘が多い。御台所は三十歳を過ぎれば將軍と同床しない。また世子^{せいし}が出来なければ側室が必要となる。諸国の大名も將軍と似たところが多い。大名の本妻と長男は江戸詰めになり、大名は一年ごとに江戸詰め

になるから国元に居るときだけでも側室が必要になる。

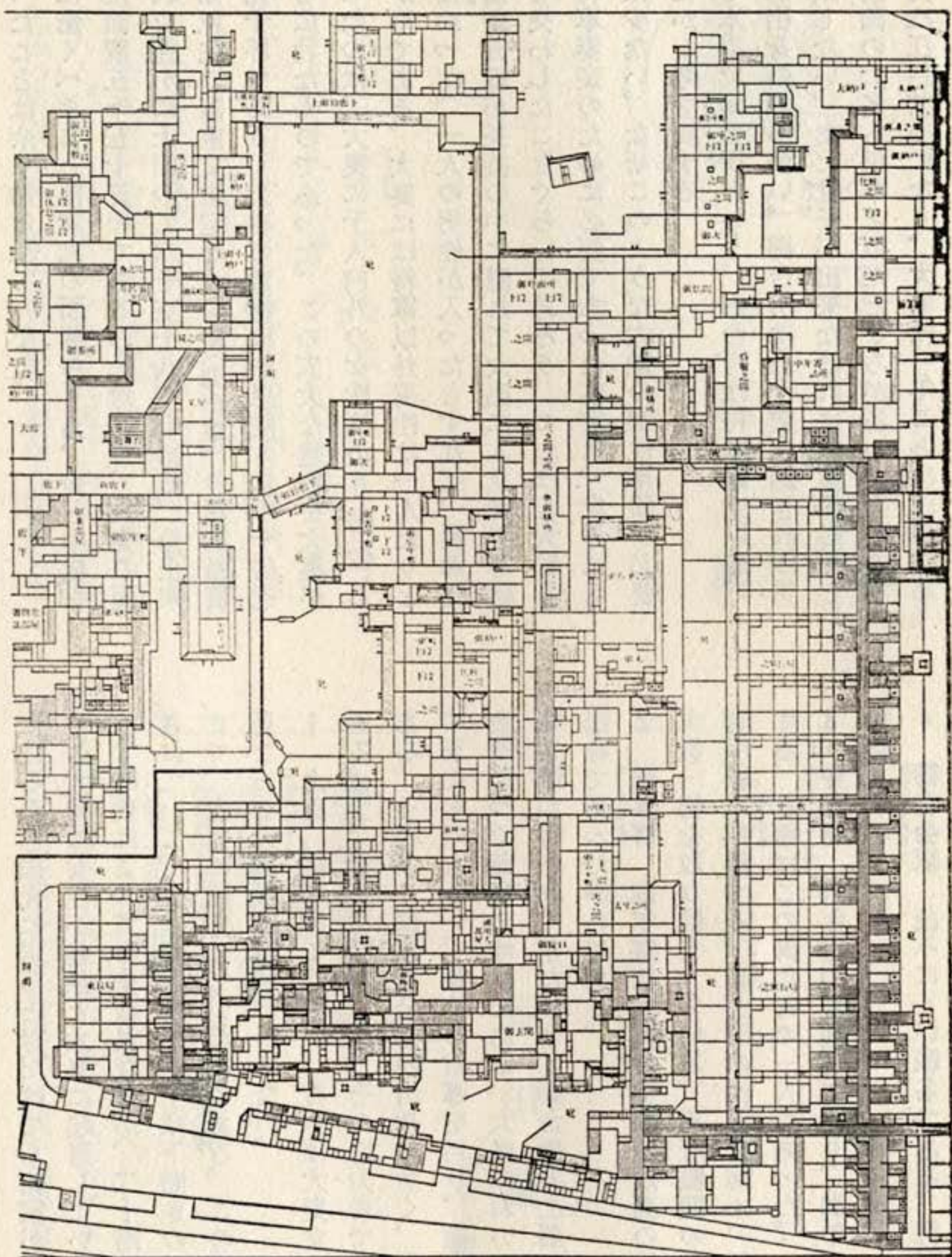
この大勢の女性が雑然と大奥に起居していたのではない。時代によって多少は異なるが、二十階の職種に組織されていて、上は御台所から下は下働きのタモンに至るまで、大奥に居住していたのである。この複雑な職種を見ないと大奥の実態がつかめない。

1 上臈^{じょうろう} 臈は郎ではない。これは大奥女中の最高位である。御台所の側近をつとめ、その協力者であり相談役である。その多くは京都公卿^{くけ}の出身が多く、御台所について来たものも多い。儀礼の指導を司り、権力は弱いが御台所につぐ最高の地位である。大奥において公家風の儀礼習慣が行われてきたのは、御台所と上臈の多くが公卿出身であったからである。

2 御年寄^{おとしより} 御年寄は大奥の実際の最高の権力者であり大奥一切を取り締まっている。幕府機関の最高権力者の老中職に匹敵する。御台所の代理を務め、外出・代参もする。絵島^{えじま}はこの御年寄の一人であった。

3 中年寄^{ちゆうとしより} 御年寄の候補者であり、御年寄に代わって代参もする。

4 御客会釈^{おきやくあしらい} 読みにくい職名である。將軍が大奥へお



——大奥の建物（弘化二年）

（左側、黒い線が中奥と大奥の境）——

成りになるとき、また来客のあるとき接待役をつとめる。御年寄などの職を終えた老女がこの職をつとめることが多い。

5 中臈^{ちゆうらう} 大奥お成りの將軍の世話をしたり、側室の役をつとめる。この側室の役は中臈の中から選ばれる。選ぶのは將軍付きの御年寄と御台所付きの御年寄が合意で選定することが多い。側室の役をつとめて將軍のお手が付くと「お手付きの中臈」といい、お手の付かない中臈を「清の中臈」という。將軍の子を宿した中臈を「お腹様^{はらさま}」といって部屋が与えられ大事にされる。中臈頭^{ちゆう}以外のの中臈は御客会積などの部屋住に起居して部屋は与えられなかった。將軍の子を生むことを目的とした中臈のために大奥の制度があるといっても過言ではない。

6 御坊主^{おぼうず} 將軍お成りのときの雑用係である。五十歳前後の老女で、剃髪し、表^{おもて}の雑用もする。將軍が中臈と同床するときも雑用の役をする。

7 御小姓^{おこしやう} 三千石以上の大身^{おおみ}の旗本の娘でなければこの役に採用されない。七、八歳のころから大奥に入り、十三歳になると元服して元服小姓となる。十六、七歳になるとこの中から中臈に選ばれる。中臈になるためには

相当期間にわたって行儀作法諸芸を修得しなければならず、將軍の相手はつとまらない。

8 御錠口^{おじようぐち} 中奥と大奥との通路の門である御錠口を管理する役名である。將軍が大奥へお成りのときは鈴を鳴らして知らせる。將軍以外の男性は御錠口から一步も大奥へは入れない。ここで將軍は中奥と大奥との相方から送り迎えを受け、この役は將軍の佩刀^{はいとう}の受け渡しをする。將軍といえども大奥へは太刀は持ち込めないのである。この御錠口は七ツ時(午後四時)に閉めるので「七ツ口」ともいった。

9 表使^{おもてづかい} 大奥の外交係で買物をしたり、表の役人と接渉する役である。將軍が大奥へお成りのとき御錠口から御年寄と表使が迎えるのである。

10 御次^{おつぎ} 仏間、台所、道具類を管理する役名。遊芸の心得も必要である。

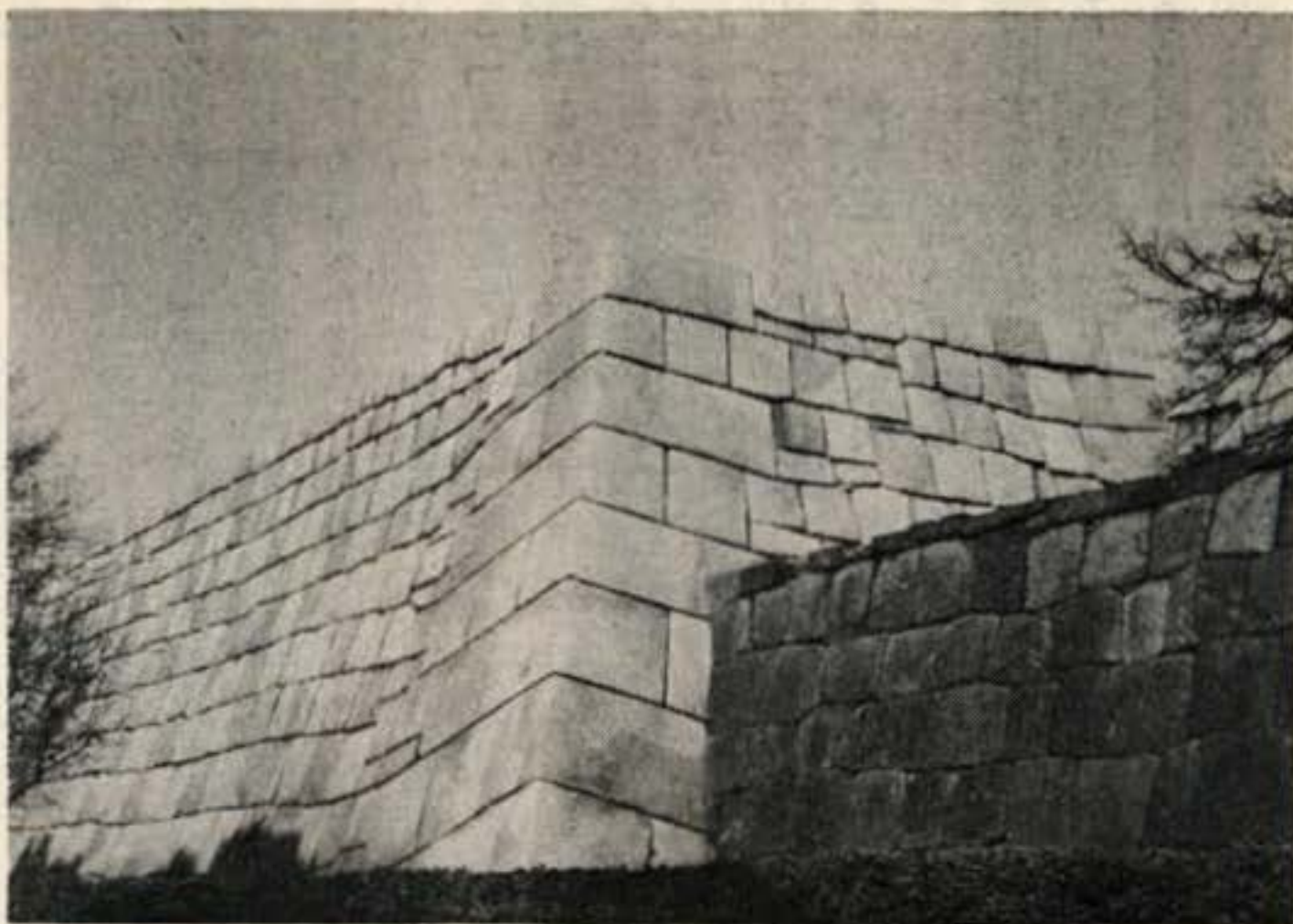
11 御祐筆^{おゆうひつ} 文書係。御年寄の指示で進物などの世話もする。

12 御切手^{おきって} 御錠口の出入の監視、大奥数百人の女中の起居する長局^{ながつぼね}を管理する役職である。

13 呉服の間^{ごふくの間} 將軍が御台所の服飾呉服を司る役名。つ

——江戸城天守閣跡の石垣

(東御苑)



——江戸城本丸、大奥の跡は
一面の芝生（東御苑）——

——江戸城本丸、
松之大廊下跡の碑
（東御苑）——



とめる部屋の名が職名となった。

以下十三の役職は大奥の中の「御目見」といって將軍と御台所にお目通りの出来るものである。以上の一と役には七、八人から十人以上いた。以下の七つの役職は「御目見」以下で將軍や御台所にはお目通りができない。



——將軍慶喜の御台所延子夫人

髪型服装はすべて公家風（芳年画）——

14 御三之間おさんのま 御三之間以上の部屋の掃除をするのでこの職名がつけられた。御年寄、中年寄の雑用もし、湯

水、火鉢、煙草盆などの世話をし、遊芸の心得も必要、その頭は御目見である。

15 御広座敷おひろざしき 大奥万端を司る庶務係の職名、その頭だけ御目見である。

16 御火之番おひのばん 昼夜を問わず各局つぼねと各女中の

部屋を回り防火管理する役職である。

17 御使番おつかいばん 代参のお供をしたり、文書、進

物などの收受を司る役名である。

18 御仲居おなかい 台所御膳部の係である。

19 御末おすえ 風呂や御膳部用の水汲み、代参の

お供、大奥内での駕籠かごかきなどの役をつとめ、女性ながら力のいる仕事である。

20 御犬子供おいぬこども 各部屋に五、六人いて雑用をする。百人以上もいたことがある。合の間の

中働き、タモンなどの下働き、雑用の小僧たちもこのつとめである。

上級の役職になるには武家の出身、大身の旗本の娘でなければ御小姓には採用されな

い。また中臈側室に出世することは出来ない。しかし下級の奥女中には町人の娘でもつとめることが出来た。大奥の女中は終身奉公であったが、下級の女中は退職することが出来た。大奥に関する内容の資料がきわめて少ないのは、大奥につとめたものは大奥に関することを口外するのを固く禁じられていたからである。しかし大奥への女中奉公は当時女性ハイクラスの職種であったので、羨望の的であった。とくに中臈御腹様になれば一族みな恩恵に浴するからである。この大奥の制度は江戸初期から漸時整い、後に奥女中法度はつとが成文化されるようになって確立した。当初その基礎を固めたのは家康側近で戦場にまで家康の世話をした阿茶局あちやのつぼねであった。

將軍は中奥に起居しているが、毎朝大奥へお成りになって先祖の靈前に参拝し、そのあと御台所をはじめ全員総御目見をする。それから幕府機関の表に出て政務を執るのが日課である。將軍が大奥へお成りになって泊るのを奥泊りおくどまりという。しかし毎晩奥泊りは出来ない。將軍先代等の命日は御精進日おしょうじんびといって奥泊りを慎むことになっている。この御精進日はひと月の中で十日くらいある。將軍が奥泊りして御台所と泊るのは小座敷である。部屋

は上段と下段に分かれ、次の間が二つある。將軍は上段、御台所は下段に床を敷く。襖をへだてて次の間に御年寄と中臈が不寝番で警備に当たるのである。

ところが將軍が中臈と奥泊りをするときは厳重をきわめた。將軍の御寝おんねの對手をする中臈は、入浴して身体を清め、白無垢姿になり、髪は解きほぐして櫛卷くしまきにする。

髪を櫛一本で止め、簪かんざしなど一切つけず、身に寸鉄を帯びないのが大切な身仕度であった。定刻一時間前に寢所である座敷へ御添寝おそいねの中臈と出向く。御添寝の中臈は記録の中臈ともいい、お添い寝をして御寝の中臈のお手伝いをするのではない。座敷には御年寄が待っていて、御寝の中臈の髪を改めて、兇器か手紙などのないことを確かめる。部屋は三十畳くらい、襖をへだてて御年寄と中臈たちによって厳重に警備されている。寢所には中央に將軍の床が延べてある。その右側に御寝の中臈の床が敷いてある。將軍の左側に床を敷き御添寝の中臈が將軍に背を向けて横臥する。さらに御添寝の中臈の左側に御坊主が寝るのである。將軍の寢所の大部屋に四人が寝るなどということは驚くべきことである。若い將軍に子供がなかなか出来なかったのはこのような変わった寢室の制度のため

めであった。世界の王侯貴族にその例をみない、珍しいベッドルームであった。御添寝の中臈は、その夜は一睡もしないで閨中の様子を明細に記録して、翌朝將軍付きの御年寄に報告することが重要なつとめである。御坊主は男性スタイルであつても老女であり、閨中に難用が發

生したときにその用を足すのがつとめである。この役もまた一睡も出来ない。それは御寝の中臈は、將軍が朝になつて帰るまで、一步も外に出ることが許されないのである。どんなに冷え込んでもトイレには行けないのである。御添寝の中臈の記録は残念ながら一件も現存していない。將軍の威信を考慮して処分したものとされる。



——大奥の御殿女中を諷刺、
泉水の金魚は当時の人気歌舞伎役者、その泉水を
舞台にし奥女中が棧敷から芝居見物（国貞画）——

この四人同室の寝所は三つの理由からである。第一は中臈に子が出来た場合、間違ひなく將軍の子であることを確認するためである。第二は御寝の中臈が將軍に対しておねだりをしたりして政治に介入させないためである。第三に御寝の中臈が將軍に危害を与えない。

いたためである。江戸三百年間將軍が寢所で危害を加えられたことは一度もなかった。將軍か御台所は昼夜を問わず一人でいることはない。便所においても御小姓が外に待っているか、中に入って監視しているかである。將軍の便所は一代一穴の便所に定っている。井戸のように深く掘り、上部に鉄柵子がはめられ外部から浸入できないように出来ていて一代の間、何十年でも汲み取りはしないのである。用が終われば小姓が手水をかけ拭きとるのである。大奥のお城づとめは女性が望んだものであり、奥女中になっても中臈になることを願ったものである。しかし大奥では「一引き、二運、三器量」といわれている。まず第一に御年寄や御客会釈のお気に入りになり、推薦してもらおうという出世のこつであった。二番目には運である。運がよければ中臈に選ばれ、御寢の中臈になることが出来る。第三番目に美人であること。現代社会にも通用しそうなことである。

京都公家が大奥に御台所や上臈を入れたのは幕府勢力を圧迫するためであり、天和六年（一六二〇）將軍秀忠の娘和子が入内したのは、その逆である。また文久元年（一八六一）和宮が將軍家茂に降下されたのはそのまた逆

である。徳川と皇室の対立和解の政治工作は大奥の舞台を背景として行われてきた。この大奥には莫大な経費を要し幕府財政を圧迫してきた。將軍家斉は側室二十一人、生まれた子供は五十人、大奥に幼稚園が必要であった。大奥は京都の影響を受け儀礼はすべて公家風、髪型から服装まで京風、御目見以上奥女中は白無垢を重ね、その上に縮緬ちりめんの間着あいぎ、その上に縮緬または綸子の掻取かとり（打掛）すべて絹物の衣服である。また髪型と衣服は、季節、式日、平日によって変えなければならない。幕府要職にあるものはこれに頭を痛めたのである。儉約を旨とし華美を戒めた老中首席の松平定信、水野忠邦は大奥にこれを及ぼそうとしたが、大奥の強い反発を受け、このためにそれぞれ失脚の一原因ともなった。しかし幕府は大奥の勢力を圧縮しようと目を光らせていた。この槍玉に上ったのが絵島生島事件である。

御年寄絵島は將軍家継の生母月光院けつこういんに仕え、大奥に権力を振っていた。正徳四年（一七一四）増上寺代参の帰途木挽町（中央区）歌舞伎の山村座に立ち寄り遊興し、帰城が遅れたことが発覚して評定所ひやうじょうしよに審議された。絵島は死一等を減じて遠島に流罪となったが、月光院の請願に

より高遠^{たかとろ}(長野県)に流された。数十人の関係者が死罪または島流しとなった。生島新五郎は三宅島に流され、山村座は断絶となった。高遠に流された絵島は、粗末な囲い屋敷に生活し、食事も朝夕二食、一汁一菜、その他の酒菓子等一切禁止、衣類は木綿、そこで二十七年を過ごし寛保元年(一七四一)六十一歳で死去した。生島はその

翌年赦免となり江戸に帰った。

絵島果つ囲み屋敷の低き屋根

高遠桜の紅が舞ひ散る

豊明

(つづく)

◎『浄土』表紙版画絵販売についての案内

好評の『浄土』誌表紙版画絵は、松浦春子先生の清楚な作品を昨年とは色調を変えて頂戴しております。今回も松浦先生のご好意を得て、豪華額縁に装丁して販売させていただきます。額縁代も含めて、金二五〇〇〇円というお求めやすいお値段で、季節感に溢れた芸術味豊かな版画掛物が購入できるわけです。どうぞ振替にてご注文願えれば幸いです。

また、大きさの方は、『浄土』表紙絵よりはずっと大きく、約20cm×30cm位の大きさですが、額縁の大きさでいえば30cm×50cm程の大変豪華な一幅となります。

(申し込み先) 〒102 東京都千代田区飯田橋一―二―一六

法然上人鑽仰会 振替(東京) 八―八二二―八七

煩惱、我執

— 死の恐怖 —

= 読者の便り =

吉^{よし}田^だ勇^{ゆう}之^の助^{すけ}

「死」ということに、関心がおき、はじめて「生」ということの大切さがわかってくる。「老人介護、家庭でどこまでみられるか？」といった問題を何回かにわたってNHKのテレビ局が取り上げていたことがあった。深く気にとめ視聴した。最近のわが国は長寿国の仲間に入ってきていることを知らしめられた。

寝たきり老人、痴呆老人等の看取りを専一にやっておられる若い人々の姿は、一九〇〇年あれのわたしには実に大きな感動を与えるものであった。

想像出来ぬ激しい痛みを伴うガン系統の病いに対して

は、激痛が始まった折、先づ鎮痛処置を、そしてそれがおさまってから治療処置を続けるという順序が望ましい。

楽な、そして静かな死を願う。

ゴリキーの名作「どん底」の中で、巡礼のルカ老人と貧と病いで死が間近い不幸なアンナが交わしている言葉は全く胸せまるもので、忘れ難い。

「だって……もうすこし……あたし生きていたいんだもの……もうすこし！もしあの世に苦しみがないのだったら……この世でもうすこしくらい苦しんでも……いいの！」。

このようなアンナの言葉には、人間の持つ「死」に対する恐怖感、そしてそれに伴なう「生」に対する執着がよくあらわされている。

はかり知れない多くの因縁で、此の世に生まれた時から「生」が始まり、死が来るまでが「生」なのである。生と死が入れ替わった後が死の世界で、そこは何人も何一つ知ることとは出来ない。

死とは、一体なんなのだろうか。大変むずかしい問題だ。

宇宙的大生命の流れに浮かび出た「うたかた」がぼつんと消えてもとの流れに戻っていくようなものだ。われわれは死体になった瞬間から、その腐敗と分解が始まり、遂に身体の方々の構成分子は元の形に戻っていくものと思っっている。

「方丈記」の書き出しは、「……ゆく河のながれはたえずして、しかももとの水にあらず。よどみにうかぶうたよたはかつきえかつむすびて、ひさしくとどまる事なし。世の中にある、人と栖と又かくのごとし……」とあって、鴨長明の無常観が深くあらわれていて実に感銘が深い。

「若い人も壮年の人も愚者も賢者も、すべて死に屈服してしまふ。すべての者は必らず死に至る」という釈尊のおことばがある。

生まれてきたのである故、人間は死んでいかねばならないが、われわれ人間は本質的に死に対し強い、そして取り除き得ない恐怖心を持っている。

知ること不可能な死後の世界がおそろしい。死はいつもこちらを見つめている。恐ろしいことだがどうしようもない。

釈尊は哲学好きな若い弟子が出した「……人間は死後も存在するのかせぬのか、靈魂と身体とは同一なのか……」等の形而上の問題については戲論なるものとして、お答えをしておられない。

「われらはこの現在の生において、この苦なる人生を克服しなければならぬ。わたしの説かないことは、説かないままに受持するがよい。わたしの説いたことは説いたままに受持するがよい……」とあるように、釈尊が説かれた『箭喻経』のおしえは忘れ難い。

仏陀釈尊のおしえである本来の仏教は、死後や来世のことを説いているものではないことがよくわかる。

死の恐怖にこだわり続ける限り安穩にいたる道に辿り着くことは出来ない。

「死ぬよりも前に愛執を離れ、過去にこだわることなく、現在においてもこせこせと思ひめぐらすことがないならば（未来に関しても）、かれは、特に顧慮することがない」（『ブツダのことば』九八四）

海と山の狭間で

—桜に関する一考察—

木きの下した隆りゅう一いち

終ついの栖すみかとして、伊豆に家を持ってから、早いもので今年で十年になる。陋屋は伊東市の南、大室山の麓の相模湾に面した雑木林の中にあつて、大室山が噴出した溶岩流の端に危なっかしく乗っかっている。二十年勤めた放送会社をやめてから建てた家であつた。放送会社の制作部というのは秒との闘いであつて、毎目が一秒一秒に骨身を削る二十年だった。秒魔に侵されて身も心もボロボロになり、ここで死ねたら……という切実な思いで建てた。

私の城いや最後の砦だったのである。

この十年、伊豆の自然は私に忘れかけていた事をいろいろと思い出させてくれたし、知らなかった事を数多く教えてくれた。日々新たな発見があった。生まれつき好奇心は旺盛な方だし、俳句をやっていたのが観察眼を養うのに幸いして、獲物を求める猟犬の目で、私は暇さえあれば歩き廻った。そのせいか、いつの間にか健康は回復していた。



この稿を書く前に、私は漠然と桜について書こうと考えていた。桜が四月の花という事もあるが、物どころついてから馴れ親しんだ花だったからでもある。昭和十三年、小学校に入って最初に習ったのが、「サイタ サイタ サクラガ サイタ」だったという事もあって、同じバラ科の植物でも、梅や杏とは異なる感慨を私は桜の花に持っていた。染井吉野と山桜の区別ぐらいはついたが、改めて考えてみると、桜に関しては全く無知なる事に気づいて愕然としてしまった。古今の和歌や俳句から、私は私なりの概念を作り上げて、それで良しとしてしまっていたのである。

先ず、バラ科の科から始めなければならなかった。広辞苑によれば、「生物分類上の一階級。目の下、属の上。例えばネズミ科をもってネズミの種類を総括し、下を幾つかの亜科に分ける」とある。そう言えば「目」とか「属」というのがあったな——思わぬ事からまた一つ忘れかけていた事を思い出させてくれた。「科」の上下をたどつて行くと、上か

ら「界・門・綱・亜綱・目・亜目・科・亜科・属・種・亜種・変種・品種」と体系づけられる事は分かったが、では分類の類とは何だと調べてみると、「たぐい、なかま、近似していること」という説明に並んで、「生物分類学で、昆虫類・羊齒類^{しだ}など『綱』の代りに、また食肉類・膜翅類など『目』の代りに慣用する語」とあるからややこしい。膜翅類？何だ蜂や蟻の事か。広辞苑をめくるうちに、思ひは桜から離れてどんどん横道へそれて行く。取り敢えず軌道修正して、バラ科にはどんな花があるか「季寄せ——草木花」を繙く。（以下、学術的には片仮名表記しなければならないのだが、漢字で表せる物は漢字とした。）桜、梅、桃、桜桃、海棠、ピラカンサ、小米花、雪柳、ユスラウメ、ニワウメ、コデマリ、サンザシ、山吹、スモモ、林檎、カリン、ボケ、クサボケ（シドミ）、梨、木苺（モミジイチゴ）、ズミ（姫海棠・小梨）、マルメロ、キシムシロと、さすがに春に咲くものが圧倒的に多い。夏の花では苺（オランダイチゴ）、草莓、蛇苺、ヤマナシ、コゴメウツギ、野苺^{のいばら}、照葉^{てりは}野苺、ハマナス、薔薇、ナナカマド、シモツケソウと種類はぐっと減り、秋咲く花は吾亦^{われも}紅^こが一つだけ。冬咲くものとしては、枇杷、冬桜（寒桜）、緋寒桜、冬苺（寒苺）が挙げられており、バラ科の植物は四季を通じて花を咲かせているのである。しかし、山吹や吾亦紅がバラ科というのは意外であつたし、枇杷にいたっては、あのごわごわした葉からしてとてもバラ科とは信じられなかったが、苺のように季節を失つたものもあれば、山吹やキシムシロに似た山吹草がケシ科、ピラカンサに類似した実をつけるウメモドキがモチノキ科、ツルウメモドキがニシキギ科というのは、私にとっては新たな発見であり、驚きでも

あった。

バラ科の植物で県花県木に選ばれているのは、青森の林檎（県花）、山形の桜桃（サクランボ——県木）、茨城の梅（県花県木）、栃木のシモツケソウ（県花）、東京の染井吉野（都花）、山梨の富士桜（県花）、京都の枝垂れ桜（府花）、奈良の奈良の八重桜（県花）、鳥取の二十世紀梨（県花）、岡山の桃（県花）、福岡の梅（県花）、大分の豊後梅（県花県木）と多彩であるが、四種の桜がそれぞれ異なっているのが郷土色を出していて面白い。染井吉野は江戸で発見された品種で、遠くワシントンのポートマック河畔の春を彩っているし、富士桜（豆桜）は富士山の祭神である木花開耶姫の化身とも言われ、京都の枝垂れ桜（糸桜）は、与謝野晶子をして、

清水へ祇園をよぎる桜月夜今宵逢ふ人みな美しき

と詠ましめた円山公園の枝垂れ桜が目に見えかぶ。奈良の奈良の八重桜は、八重桜としては珍しく実を結ぶので、特に「奈良の」という名をかぶせたとか。伊勢大輔が、

いにしへのならの都の八重桜けふ九重ににほいぬるかな

と歌ったのは、この桜であったかも知れない。この歌は藤原定家の「百人一首」にも選ばれているが、「百人一首」の中で桜を詠んだものは、この他に、

花のいろはうつりにけりないたづらに我身よにふるながめせしまに

久堅のひかりのどけき春の日にしづ心なく花の散るらむ

人はいさこころもしらず故郷ははなぞむかしのかに匂ひける

小野小町

紀友則

紀貫之

諸共に哀あわれと思え山桜花より外ほかに知る人もなし

大僧正行尊

高砂の尾上おのへの桜さきにけりとやまの霞たたずもあらなん

前中納言匡房

花さそふあらしの庭の雪ならでふり行ゆくものは我身なりけり

入道前太政大臣

の六首にすぎない。意外の意外である。

桜のルーツは不明とされているが、山桜ではないかと私は思っている。桜は交雑を繰り返して、いま見られるような多種多様の花を咲かせて我々を楽しませてくれているが、私は山桜が一番好きである。花卉の白の浄らかさと若葉の燃えるような色合いが、何とも言えずいいのである。

戦災で一切を無にした私の手許に、なぜか建軍精神普及会が昭和十八年二月二十日に改訂発行した「愛国百人一首早わかり」という小冊子がある。佐々木信綱、斎藤茂吉、折口信夫、北原白秋等、当時の錚々たる歌人十二名に委嘱して選ばれた割には見るべき和歌はそれほど数多くはない。本居宣長の、

しきしまのやまと心を人とはば朝日ににほふ山ざくら花

もこの中に含まれている。一時期、私はこの歌が嫌いだった。第一次神風特別攻撃隊の隊名をこの歌から採ったからである。敷島隊、大和隊、朝日隊、山桜隊がそれで、全員フイリッピン沖で散華してしまった。隊名を決めたのは誰だったか知らないが、以後続々と前途有為な若者を死なせてしまった事を思うと、この歌にはやり切れぬ思いがつきまとうて仕方がない。しかし最近では思い直して、純粹に歌は歌として認めてやろうという気持ち

ちになっている。「朝日ににほふ」は言い得て妙ではないか。

「愛国百人一首早わかり」の奥付の日付で思い出したのが、熱海曾我の浦にあるMというドライブ・インの駐車場の桜である。立札に「ここの桜は二月二十日に咲く」と断定しているのがおかしい。冬桜の一種だと思うが、二月二十日が娘の誕生日でもあるので、我が家ではこの桜に娘の名を冠して「ひろみ桜」と呼んでいるが、今年は暖冬のせいかな、二月初めに通った時には、すでに五分咲だった。気温の高低が開花に影響するのは事実だが、伊豆大島では、昨年十一月の噴火の際、溶岩流が走ったそばの桜が一斉に花開いたというから、熱を与えていれば開花の調節は可能という事であろうか。

花と言え、いまでは桜を指すのが一般的であるが、平安時代の中頃までは舶来という事もある、むしろ梅の方が珍重された。しかし、農業特に稲の出来不出来を占うために、農民が桜の開花落花に一喜一憂した事から、次第に桜が勢力を得て梅にとって替った。御所の左近の桜もはじめは梅であったが、この梅が天徳四年に焼失すると、時の村上天皇は山桜に植え替えてしまった。これも稲作の吉凶を占うという事で、植え替えられたのかも知れない。右近の橘はときじくのかくのこのみ非常香菓、不老長生を願う意味で植えられたと思われるが、左近衛府の植栽担当者も右近衛府の担当者も、育てるのには随分気を使い、おそらく代替用の桜や橘の林を御所の近くに作って、有事の際に備えていたのではあるまいか。

暖冬と言われ続けたこの冬だったが、二月終わりの寒の戻りで春の歩みも一頓挫した。しかしいまや春もたけなわ開、桜前線は今日はどの辺りを北上しているのであるだろうか。

五月書房選書

大正大学学長・文学博士
全日本煎茶道連盟顧問
装道きもの学院非常勤講師

安居香山 著

正坐の文化

◆煎茶道の文化とその思想◆

■永年にわたり書きためてきた、煎茶道・着物・花・正坐論を一冊にまとめ著者の日本の伝統文化観をここに開陳する。是非ご愛読下さいますようご案内申し上げます。

●推薦します●

黄 檗 宗 管 長

全日本煎茶道連盟会長

装道きもの学院

装道礼法学院 理事長

村 瀬 玄 妙 貌 下

山 中 典 士 先 生

■内容

一章 正坐の文化

二章 煎茶道の歴史と思想

三章 売茶翁に学ぶ

四章 茶道小論

五章 茶と旅

六章 茶事漫筆

■体裁

四六判／上製／口絵二頁 定価一、六〇〇円（二二五〇円）

五 月 書 店

〒101 東京都千代田区猿樂町二一六―五

電話 〇三―二三三―四一六一

振替 東京九―三三九四三

取引銀行 三菱銀行神保町支店

当座番号九〇―二四六三

立ち止まるな善導

〈34〉

寺内大古

挿絵・松濤遠文

歴史の空洞

七

「この浮屠仏は？」

と厭勝師の明崇儼は、洞窟の正面壁に丸く
浮き彫りされた仏像を指さして訊いた。

「阿弥陀像だな。紀国の太妃韋氏の造建にな

る」

王徐明は手にした顯慶版（六五八）の「石像
銘」を覗きこんで答えた。

韋氏は太宗の妃で、紀国王の慎（太宗の第十
子）を生んでいる。西山の第五窟、敬善寺洞
と呼ばれる三米立方ほどの小洞窟である。造
建の年時は詳らでないが、太宗在世中の貞観
年間である点は間違いない。



の上疏文には「老子が夷狄へ入って仏陀と成った」とし、「老子は四方の関所を出て沙漠を抜け、遂にインドへ達し、インド人を教化、道経を信じさせた」とも説く。だから流入した諸仏典はみな道教神仙の方術を説いたものだという。

浄土教もその例外ではなく、民衆の救済を誓った無量寿仏は、道教に属する一個の「外神」なのであった。

道教の国家宗教化は北魏の寇謙之（三六五—四四八）によって完成されたと言われる。その完成後、仏僧たちは道教との峻別を主張したが、かえって道士の進言によって「廃仏」の受難を経験しなければならなかった。

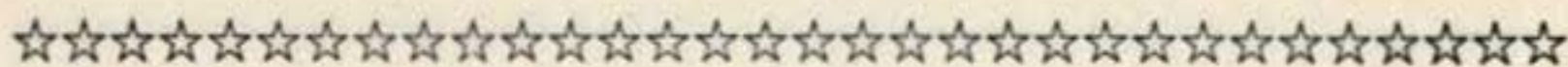
廃仏の受難期に育った曇鸞（四七八—五四二）は北魏を逃がれ、奉仏帝たる梁の武帝治下の江南へおもむいた。そこには武帝の尊崇を集める「山中宰相」の陶弘景（四五六—五三六）がいた。彼は道・仏混淆論の大成者で、曇鸞に未知な經典を付法しつつ同時に不老不死の仙

術も授けたと言われる。

伝説は、陶弘景と別れた曇鸞が洛陽へきて西域僧の菩提流支（五〇八来朝）と会い、「観無量寿経」を与えられ、陶弘景の仙經十巻を焼き捨てて浄土の一念に帰入した、と語る。おそらく後世の浄土教徒による造作であろう。菩提流支を「観経」と結束させる資料もない。また曇鸞の呪術性は、道教の呼吸法に「曇鸞法師服氣法」などで遺っている。

曇鸞が生きた時代背景を思えば、その称名念仏に道教臭が混じていたとしても不名誉のはずはない。やはり曇鸞は称名念仏の鼻祖なのである。仏の名号は、衆生の無明を破し、一切の願いを満たし、仏の「実相身」（真実の姿）と「為物身」（救済の姿）とを透視できるようになり、信心を深め、心気を統一相続させる功力のあることを曇鸞は強調した。

ただ、「観無量寿経」の下品下生段にある「称南無阿弥陀仏」のくだりを「称南無無量寿仏」と改めさせている。これは道教の諸神



献
仏



王徐明は居直った。あの和上に指一本でも触れさせないぞ。

「いやいや、そんなことは申しておらぬ。ただのう」

「ただ、何だ」

「わしは天后に申上げることにするぞ。そんな僧をお頼りになって、造仏なぞなされたら必ず良からぬことが発生するであろうとな」

その場では言い争わないことにした。激昂させるだけ損な相手でもあった。出かたをうかがっているのが得策であろう。

夜が更けると、王徐明の寢室へ童子の使者が現れた。

「王后さまが火急のお召しでございます」

皇太子李賢の書齋へ案内された。そのの炕床に則天武后は腰をおろしていた。あの晩とは異なり、炕床に火気はなかった。すでに冬は去って、紙窓を開けたいほどの陽気であった。

「ここへいらっしゃい」

武后は艶然と笑みをうかべて王徐明をさし招いた。

「今日は石洞をひとわたり検分して歩きました」

警戒心を強めながら炕床の端へ距離をおいて坐った。事務上の会話へはいるほうが無難である。高宗皇帝は未だこの洛陽宮に滞留中なのである。

「そうだそうね。明があれこれ申してききました」

「こんどの造仏が不吉だとか何とか言いつのつたのではありませぬか」

「不吉だと言っても、もともと罪をつぐなう目的ではありませんか。それ以上に不吉なことはないはずですよ」

「では、なぜ私どもに検分させたのですか」

「徐明や、こうするためによ」
武后はいざり寄ってくると、手をとらえて握りしめた。その手をおのれの胸先へ持つてゆく。

「徐明や」

「何ですか」

「そこに筆と硯があるでしよう」

「ございます」

「書いておくれ」

「何を書くのでしうか」

「詔勅です」

「何ですって」

「詔勅を書くのですよ。天子の詔勅よ」

「こんな姿ですか」

王徐明も一糸まとはぬ全裸であつた。

「筆は手に握るもの。衣服なぞ不要でしう」

「でも天子の詔勅とは、恐れ多いにもほどがあります」

「天子がそれを読んでこそ恐れ多いのです。紙に書いている分には、ただ墨をなすりつけているだけじゃありませんか」

「何の詔勅ですか」

「妾が音読してあげるから、そのまま書けば

よろしいの。それさえやっておけば、今宵の罪深かったことは、すべて帳消しになるんですよ」

今夜は徹して詔勅分をこしらえた、と明朝高宗皇帝に弁解するつもりであらう。ひと晩、寢室を離れた釈明だ。

それにしても肉の饗宴を喰いちらした直後にビジネスをやつてのける。則天武后とはそういうエネルギーを持ち合わせた女だったのである。

「国家の聖緒は、玄元皇帝より出づ……」
やや眠むたげな声音だったが、一語一語を正確に呟いてゆく。

玄元皇帝とは、老子の尊称であつた。いや、そんな尊称は過去にない。この翌朝、武后は高宗に老子をそう呼ばせるべく上表したのである。高宗は無抵抗にこれを受容し、詔勅を発した。

——国家の聖緒は、玄元皇帝より出づ。王

高八十五尺。二菩薩七十尺。迦葉、阿難、金剛、神王、各高五十尺、粵以咸亨三年壬申之歲、四月一日。皇后武氏脂粉錢二萬貫、奉勅檢校僧、西京實際寺善導禪師。法海寺主惠暕法師。大使司農寺卿韋機、副使東面監上柱國焚元則支料。匠李君瓚成仁威姚師等至上元二年乙亥十二月三十日、畢功。調露元年己卯八月十五日、奉勅大像南置大奉先寺……

咸亨柱國三年四月一日（六七二）に工を起し、落成が上元二年十二月三十日（六七五）で、三年と八カ月余の歳月を要したことがわかる。これを検校したのが西京（長安）實際寺の善導である。「導」の字が「道」に変わることは各種文献にあることで、念仏者の善導だったことはまぎれもない。

これを助けた法海寺主の惠暕法師となつてゐるが、彼が善導の愛弟子で、後に實際寺主ともなつた懷憚であることも立証されてゐる。

碑文にある奉先寺だが、空洞内の大盧舎那仏が完成したあと、前面空地に仏殿が勅令によつて建立された。今日では消滅して跡方もないが、大空洞を奥殿として抱えこんだ奉先寺は、同時に竜門石窟すべての表玄関だったわけである。

こうした構想を誰が描き、実施したのであるか。すでに皇帝高宗はなく、独裁女帝となつた則天武后の治世であつたから彼女以外の手では成し得なかつたはずである。

このように奉先寺洞の大盧舎那仏の造立は則天武后の治下であつた。彼女以外に祈願者はありませんのである。

その日、前ぶれもなく工事現場へ突然、善導が姿を現した。王徐明は武后に供奉して長安へ去り、少年憚良がこれを迎えた。

「和上はどこからおいでになりましたか」

善導の居住は長安、終南山、あるいは襄陽と定かではない。じつは咸亨三年四月の起工式にも検校僧とは名ばかりで、姿を現さなか

ったのである。

「このところしばらく洛陽に止錫していました」

「洛陽……どこですか」

少年はびっくりした。すぐ間近いところへ来ていながら洛陽宮を避ける善導だった。そういう人なのである。

「白馬寺をはじめとして、あちらこちらの寺々をな」

「ごらんのとおり、だいたい工事が進行しました」

「はて、これは何の工事だったかな」

「皇后さまが懺悔のために……」

今更説明するのも臆怖なほどに、善導は彼自身に関したことは執着がない。検校僧のことなど、けろりと忘れているのだ。

「そうだった。皇后さまのあの懺悔はつくりものではなかった。心から悔いあらためていた。わたしも心に沁みておぼえている。それと、この工事とどんなかわりがあるのか

な」

「懺悔を大盧舎那仏のお姿にかえて、表白なさろうとしていらっしゃる」

「懺悔の造仏でしたか。それも結構でしょう」

あまり気乗りのしていない調子であった。よもや反対では、と憚良はあわてて念を押してみる。

「造仏などは無意味でしょうか」

「無意味ではない。有難いことです。ただし……」

「ただし、何でしょうか」

「造仏することで懺悔する心が軽くなるようなら、かえって悪い結果を招きます。財物や労力を積んで、それで罪がはれたと信じこみ、おごった気分になる。その気分は懺悔をしない前よりもさらに悪い心の状態です」

伯母の近ごろはどうであらうか。少年憚良は胸を痛める。

たしかに竜門石窟の工事開始とともに武后

の表情、全身にそのイヤらしい精気がみなぎってきいた。方士の王徐明もどうやらその妖気へ巻きこまれてしまった気配がうかがえる。

善導は、懺悔による立塔造仏は懺悔する以前よりも悪い状態になる、と断言した。則天武后から、終南山含風殿で閉居していたころの謙虚さが失われているのも間違いないところであった。

善導の、この考え方こそ、**“自力”**よりも**“他力”**をすぐれたとする主張の根拠となる。**“自力”**の欠点は、いちおうの目的に達すると、おごって倦怠の道へ迷いこんでしまう。

“自力”でつきつめる集中力が、いつまでも持続できない人間機能の弱点にもよる。その点**“他力”**は一見なまぬるいようで、長途に耐え得るのである。仏にゆだねきって現実生活に静かに処理してゆけるからである。懺悔をかさねつつも、これで終点だというものがない。

それでも善導は石壁にへばりついてノミを

使う石工たちにねぎらいの声をかけて歩いた。造像の完成にケチをつける気は毛頭ないようである。

「善導和上か」

空洞出口の方で声がした。

「明方士——」

憚良は嫌な気分だった。善導和上をこんな厭勝師に紹介するなんて。でもすぐに紹介しなければならぬ局面であった。

「かねてお会いして、御高説をうかがいたいと思っていました」

明方士は一段と下手(したで)から物を言おうとする。

「お会いできて嬉しい」

善導もやわらかく受け流した。

(つづく)

◎読者の皆様へのお願

弊会会員の年会費は三、〇〇〇円です。月刊誌『浄土』を細々と発行しながら、念仏信仰の増進に努力しています。新しい読者を広くご紹介下さい。

また誌面においては、『浄土』誌と会員諸兄の皆様とのより一層の繋がりをはかるために、従来よりたびたび企画されたことでもありますが、誌面の数ページをさいて、不定期ながら随時「読者のコーナー」を設けております。左記要領で、どうぞふるってご投稿下さい。誌面充実のために、宜しくご協力下さいませ。

- 一、内容 自由（生活の一コマや我感あるいは思うことなどをエッセイ風におま）とめ下さい。
- 一、枚数 四百字詰用紙七〜八枚程度
- 一、締切 毎月五日

法然上人鑽仰会

「浄土」購読規定

会費一カ年 金三、〇〇〇円

（送料不要）

浄土 五十三巻 四月号

昭和十年五月二十日

第三種郵便物認可

昭和六十二年 三月二十五日 印刷

昭和六十二年 四月 一日 発行

編集人 宮林 昭彦

発行人 佐藤 密雄

印刷所 長谷川印刷

東京都千代田区飯田橋一―十一―六

発行所 法然上人鑽仰会

電話東京二六二局五九四四番

〒一〇三 振替東京八―八二一八七番

第五十三卷

四月号

昭和十年五月二十日 (第三種郵便物認可) 毎月一回一日発行
昭和六十二年三月二十五日印刷 昭和六十二年四月一日発行